

木村定三コレクション「竹工芸品」目録から

(本文pp. 22-55)



杓（正面）



杓（側面）



共筒



中箱と筒袋



No.5 千利休《千利休茶杓》 M2488 (本文p. 27)



杓（正面）



杓（側面）



共筒



筒袋



No.8 杉木普斎《杉木普斎茶杓 銘水仙》 M2491 （本文p. 30）



共筒



杓（正面）



杓（側面）

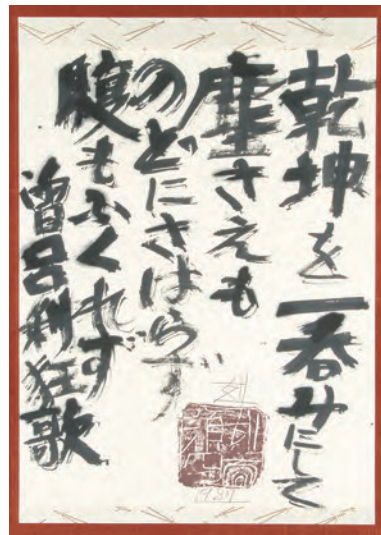


筒袋と茶杓袋

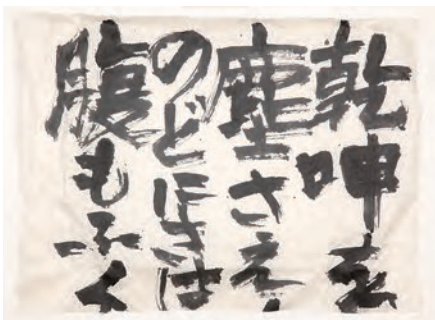
No. 10 原叟宗左《原叟宗左茶杓 銘亀齡》 M2489 （本文p. 32）



底



(参考)
須田剋太《曾呂利狂歌》
1987年作 紙本墨書 掛幅装
愛知県美術館蔵
木村定三コレクション M2095



箱底にあった書断片

No. 15 《杉皮炭取》 M1541 (本文p. 36)

判断保留とした作品（詳細本文参照）



節部拡大



参考 モウソウタケ 孟宗竹の節部分
節の環は一重であり、鋭く突起している。
(2018年1月18日 岐阜県揖斐川町編者撮影)



参考 マタケ 真(苦)竹の節部分
節の環は2本の盛り上がった隆起線が見られる。上の隆起部分は比較的丸い。
枝は節から2本ずつ出るが、枝の出た所から上に溝（芽溝）ができる。
(2018年1月18日 岐阜県揖斐川町編者撮影)

No.4 伝杉木普斎《舟形花入》 M1279（本文p.26）



銘



花押

No. 20 伝杉木普斎《竹蓋置 銘三休》 M1434 (本文p. 39)



花押

No. 21 伝藤村庸軒《竹蓋置 銘汐干》 M1433 (本文p. 40)

杣木普斎自在
狂哥

鋺山田龜斎作書

三松菴常付



No. 23 伝杉木普斎《狂歌入自在》 M2208 (本文p. 42)

木村定三コレクション「竹工芸品」目録

編集 長屋菜津子

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、竹工芸品とその付属品の一部を掲載し、解説を付したものである。但し、素材に竹が使用されていても、既に漆工芸品目録（愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編21号）に所収の品については割愛したものもある。
- ・現時点で、作者や年代等の判断が保留となっている作品については、保留とした理由を添えた。受贈時に作者名が付されていても、調査の結果、根拠が充分とまで至らなかったものについては、作者名の前に「伝」を付した。今後の研究の進展を俟つものである。
- ・作品名は、各作品の調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各作品のデータは、掲載番号、作者、作品名、製作年代、素材・技法、寸法（cm、染色工芸品に関しては小数点以下を四捨五入した）・重量（g）、員数、コレクション番号、美術館所蔵作品登録番号の順に記載し、これに木村定三氏の手帳記録情報を入手年に続くカッコ内に付した。
- ・木村定三氏の手帳記録についての詳細は、足立好弘による報告文（本書、pp.15-21）を参照されたい。ここでは手帳記録情報の内、木村定三氏の入手年およびその時点での木村氏による呼称等を抜粋して掲載した。
- ・掲載の順は、近世（江戸時代以前）、近現代（明治以後）の2つの章に分けた後、用途別とした。「見立て」による転用品は木村定三氏による用途を優先とした。
- ・近世の章は池田瓢阿氏の調査を基に、池田氏の作品解説を中心に編集した。付属する染色品のデータは長崎巖氏の調査を基にしている。『茶道具 - 金属工芸・竹工芸を中心に木村定三コレクション』愛知県美術館、2014年所収の池田瓢阿氏解説を再録したものについては、（池田 2014年発行『茶道具』より再録）、今回新たに執筆して頂いた解説については、（池田）を、それぞれ文末に付した。
- ・編者による補足説明を末尾に付した。
- ・箱書や極などで、擦傷や欠落、あるいは判読できなかった文字は□と表記した。

竹工芸の調査は、受贈直後の一次調査を古田浩俊、鯨井秀伸、池田素子が行った。2012（平成24）年から始まった学術調査は近世の作品を中心に池田瓢阿氏が行い、長屋菜津子が担当した。またこの一連の調査では、高木久子、加藤里英、加藤慎吾の調査補助を受けた。

調査およびこの編集に多大なご協力ご指導を賜りました池田瓢阿氏と、箱書等の解説にご協力頂きました愛知県美術館友の会所蔵品管理サポート部会の荻野孝氏、加藤喜美代氏に、心から御礼申し上げます。

本目録の掲載作品の中で、一部著作権者の不明なものがありました。関係者の方がおられましたら、ご連絡頂けますと幸いです。

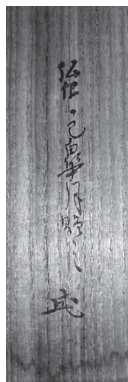
近世 花入



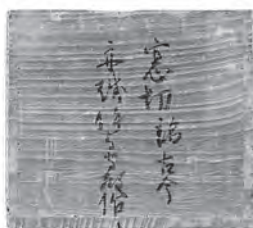
本体裏面



箱蓋表



箱蓋裏



箱側面

1 舟越永景 舟越伊予守永郎右衛門竹一重切花筒 銘古今

江戸時代初期 17世紀

竹地梨地漆

総高31.4 口径13.2 重さ853 1口

M1266 JA200300434000

1953(昭和28)年 (船越伊豫守一重口花筒 銘古今)

舟越伊予守永景(1597~1670)は、徳川幕府の旗本で、作事奉行としても活躍した武家茶人である。茶は古田織部(1543~1615)・小堀遠州(1579~1647)に学び、片桐石州(1605~73)とともに將軍家の御道具奉行をつとめた

本作は、たいへん太く肉厚な苦竹の根に近い部分を伐った、堂々とした一重切の竹花入である。花入れの正面には、竹が成長する過程で出来る裂けがあり、歪みながら成長する竹の勢いも伝わって来るようである。また、その造形に見られる、狭い花窓、節切りなどの様式は、遠州・石州と続く武家茶人の竹花入の特徴でもある。また、本作の内側は梨地で彩られ、花入の裏面には、金の字形で「古今 舟伊よ守」とした、永景の筆跡を見ることが出来る。

(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

(箱蓋表墨書)「舟越伊豫守□作/一重切花筒 銘古今」(箱蓋裏墨書)「□□□□自筆月の尔て(不明花押)」(箱側面墨書)「窓切 銘古今/舟越伊予守□作」(本体裏面)「古今 舟伊よ守」風呂敷に定三氏の「舟越伊予守/一重/竹花筒/銘古今」の墨書

「船越」と表記されることが一般的だが、本作の場合、署名が「舟越」であることから、舟越の表記を採用した。

蓋裏墨書、冒頭の4文字を「弘化乙巳」とすると1845年のこととなる。花押は舟越のものとは異なり、かつ誰のものか不明。(編者)

2 杉木普斎

すぎきふさい
すぎきふさいほそたけはないれ めいあしびき
杉木普斎細竹花入 銘足引

江戸時代前期 17世紀

竹造

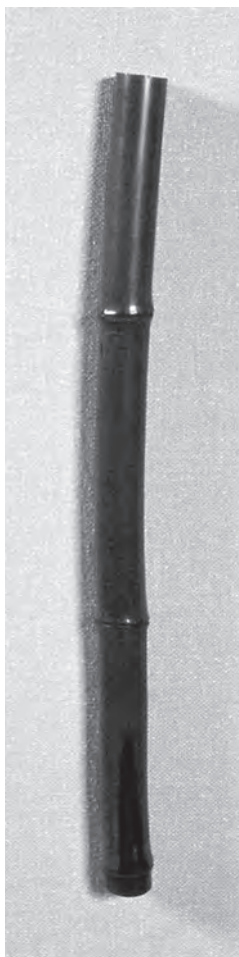
総高57.5 口径3.45 重さ248 1口

M1551 JA200300653000

1963（昭和38）年（普齊尺八花入 銘足引）

床の間に掛ける「向掛け」、あるいは床柱に掛ける「柱掛け」用としてつくられた竹花入である。材には、三節の細い白竹が用いられている。銘の「足引」は、万葉集に載る、柿本人麻呂の歌「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜をひとりかも寝む」から取り、「長々し」を、この花入の長さにかけている。多少、落剥はあるものの、花入の裏面に「足引 普（花押）」と、銘および普斎の署名と花押が、朱漆で記されている。なお、箱の蓋表には「尺八花入」とある。
（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱蓋表墨書）「尺八花入/銘足引/杉木普斎造」
（外箱側面貼紙）「一四二」「普斎/尺八花入」（外箱側面墨書）「□□□」（内部紙片墨書）「柿本人丸/あし引の/山鳥のおのしだりおの/ながながしよをひとりかもねん」（本体裏面）「足引 普（普斎花押）」



本体裏面



内部紙片と蓋表

3 ひらさわくろう 平沢九朗

ひらさわくろうわなしにじゅうざりたけはないれ めいじゅうろう
平沢九朗無輪二重切竹花入 銘寿老

江戸時代後期 18世紀-19世紀

竹造

総高26.5 口径5.1 底径5.8 1口

M2293 JA200300816000

1947（昭和22）年 （九朗 二重切花筒

銘「寿老」不染箱）



平沢九朗（1771～1840）は、江戸時代後期の尾張藩士であった。仕官の余暇に作陶に励み、その作になる茶入・茶碗・花器などが九郎焼と呼ばれ、人々の愛玩するところとなったという。本作は、小堀宗中・松尾宗五などを茶友とする数寄者でもあった九朗の残した竹の花入である。

本作は、松尾流十代・不染斎（1899～1972）の箱書きに「無輪二重花生」とあるように、小堀遠州作の「再来」花入に始まる「二重切」の上の花窓を切り捨てた形に切られている。花は、花入れ中央に切られた花窓に生ける。もしくは、上の筒にも生けて使われる。花入の裏面には「寿老 九朗（花押）」と朱漆で書き残している。

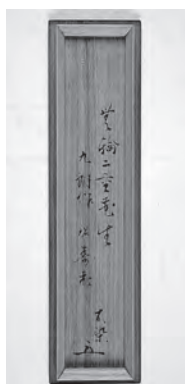
（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（箱蓋覆紙墨書）「平澤九朗作銘寿老/無輪二重切竹花生」（蓋裏墨書）「無輪二重花生/九朗作銘寿老/不染（不染花押）」（箱側面貼紙）「九朗/竹花入」本体裏面（本体裏面）「寿老/六十二翁/九朗（平澤花押）」

「九郎」と表記されることが多いが、本作の場合、署名が「九朗」とされていることから、「九朗」の表記を採用した。不染斎も定三氏の表記も「九朗」の表記を採用している。（編者）



本体裏面



箱蓋裏

4 でんすぎふさい
伝杉木普斎
ふなをはいれ
舟形花入



不明

竹造

総高（取手含む）37.0（身高）19.1

幅31.27 奥行19.7 1口

M1279 JA200300447000

1955（昭和30）年（普斎「舟花入れ」竹

歌銘「七福や迎えに行くや五千石」

（紐付属の木札墨書）「普斎/五千石舟」（蓋表貼紙）
「二百五拾口」（箱側面貼紙）「普斎五千石舟」（箱
蓋裏墨書）「口入庵捺口/普斎舟花入/發句銘/七ふく
を迎いに/いくや五千石/一餅庵圖」（本体）「七ふ
くを迎いに/いくや五千石」風呂敷に定三氏の「普
斎/竹花入/五千石」墨書

現時点で、作者を判断保留とした作品である。一
番の問題は使用された竹が孟宗竹であるという点で
ある。本品、孟宗竹、真竹、それぞれの節の部分の
拡大画像を比較することにより明らかだが（カラー
ページP.6参照）、本品の節は一重であり、孟宗竹の
特徴を持つ。孟宗竹の日本への伝来は江戸時代中期
（『茶道具—金属工芸・竹工芸を中心に』愛知県美術
館、2014年 p.14）であり、杉木普斎が活躍した時
代と合わない。しかし孟宗竹は東南アジアあるいは
南方中国等では、古来より船のマスト等に使用され
ており、極まれに難破船、その他の漂流物として、
日本に伝来した例もある。そのため、本作品の判断
は、本品に書かれた歌の書蹟としての調査結果を待
つこととした。なお、調査者である池田氏は「新し
い竹ではなく、少なくとも江戸時代中期から後期の
ものであるだろう。全体の造形も見事である」と評
された。（編者）



上部



側面



木札表



木札裏



箱蓋裏

茶杓・茶合



杓（正面）



杓（側面）



花押



中箱蓋表と筒袋



中箱蓋裏



外箱蓋裏



外箱底

5 千利休（抛釜斎 宗易） 千利休茶杓

桃山時代 16世紀

竹造（煤竹）

全長18.10 幅0.50～0.95 重さ1.7 1本

M2488-1 JA200300865001

1947（昭和22）年（利休 共箱茶杓 判アリ 碌々
齊箱書付 惺齊外箱書付）

本作は、典型的な利休型の竹茶杓である。利休には何人かの下削りがいたといわれるが、もっとも名を知られているのが、堺の甫竹である。利休型の竹茶杓は、この甫竹と利休の間で生み出されたのである。その利休型茶杓の条件はいくつかある。

樋（竹の幹にある溝）は深く、中節（杓の中央に節があること）であること。上から見ると、櫛先（先端）は丸く、櫛先から中節にかけては徐々に細く、中節から切止（末端）に向かっては真っ直ぐに削られていること。側面から見ると、櫛先は丸く撓め（曲げ）られ、中節は蟻腰（目立って高い節をあらわす表現）で、切止は三刀（三手で削ること）であること。そして、細く薄く削られ、手に取ると大変軽く感じられること。全体に漆が拭かれていることなどである。

本作は、こうした多くの利休茶杓の条件をほぼクリアしているといつてよい。また、共筒も、利休茶杓の条件を満たしている。真っ直ぐな竹を、丁寧に削り、真筒（竹の表皮をすべて削り落とした筒）とした薄作で、詰蓋の形も程よく、全体に漆を拭いている。詰蓋と筒の間に記された利休の花押は、漆書きであることがやや気になるが、この点は専門の研究者に任せたい。なお、本作には、表千家11代の碌々斎の内箱と12代の惺齊の外箱が添う。（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱蓋裏墨書）「利休作茶杓/共筒判アリ/箱碌々
極書付（惺齊花押）」（外箱底墨書）「千利休宗易居士/茶杓共筒/□□判添書/杓作一□勝タリ/右古筆了
仲（惺齊花押）」（外箱側面貼紙）「利休茶杓」（中
箱蓋表朱漆）「千利休茶杓」（中箱蓋裏朱漆）「利休
茶杓筒共判アリ（碌々斎花押）」 風呂敷に定三氏の
「利休共筒/茶杓」墨書

瑞翁宗左碌々齊（1837～1910）表千家11代

敬翁宗左惺齊（1863～1937）12代（編者）

紺地鉄線唐草模様緞子茶杓中筒袋

江戸時代後期 19世紀

緞子

全長26 幅4

M2488-2 JA200300865002

6 ^{せたかもん}瀬田掃部
^{せたかもんちやく}瀬田掃部茶杓

桃山時代 16世紀

竹造（煤竹）

全長18.55 幅0.62～1.20 重さ2.57 1本

M2487 JA200300864000

1947（昭和22）年（利休七哲 共箱 判アリ 宗
參箱 筒体ノ外太ク面白シ「大鵬茶会」に使用す。
平成7年：上飯田小茶会に使用の予定）

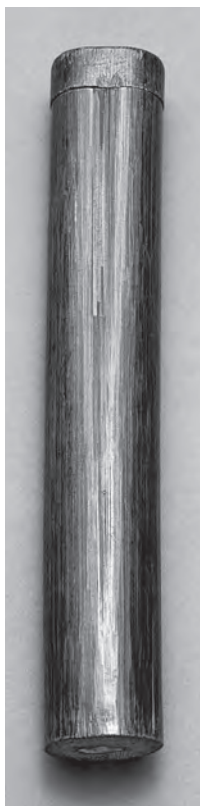
瀬田掃部（？～1595）は、桃山時代の武将である。利休七哲のひとりにも数えられ、茶杓の名手とされた。『南坊録』には、掃部が愛用した大きな古高麗茶碗に、利休から「勢多」と名付けた大きな茶杓を添えるよう贈られたという逸話が伝えられているが、掃部は、この茶杓を手本に茶杓を削ったため、掃部の削った茶杓はみな大振りになったという。

本作は、逸話通りの大振りの茶杓。權先が開いたように大きいのは掃部の型で、撓めは浅く、直腰（低い節をいう）で、切止は二刀。掃部作としては、やや權先の形が異なり、全体に鄙びた感じがあるが、豪壮で、武士にふさわしい茶杓といえるだろう。材料には煤竹（農家の天井材として数百年燻された竹）の逆樋（枝跡の残る節からあらわれる溝）の部分が使われている。また、共筒は白竹で、少し削り残しのある真削り。この杓を入れてもかなり余裕のある大型の筒である。

なお、本作には京都の久田家四代・久田宗也の孫で、尾張に久田流の茶を根付かせた両替町久田家の6代・宗參の書付による極箱が添う。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（箱蓋表墨書）「掃部作茶杓共筒」（蓋裏墨書）「瀬田伊繁造/印在/宗參証（宗參花押）」



共筒



杓（正面）



杓（側面）



箱蓋表



箱蓋裏

7 ^{すぎきふさい}
杉木普斎
^{すぎきふさいちやしやくめい かまきり}
杉木普斎茶杓 銘カマキリ

江戸時代前期 17世紀

竹造（白竹）

全長19.50 幅0.70～1.14 重さ3.66 1本

M2834 JA200300895000

1947（昭和22）年（杉木普斎 共筒茶杓 銘「カマキリ」玄々斎箱書 狂歌入り 蜻蛉のおの連はよしと思へとも 茶道流者は嘸おかしから 定三銘「天下御免」）

杉木普斎（1628～1706）は、伊勢神宮の御師の家に生まれた。15歳の時から千宗旦に茶を学んで、その四天王と呼ばれ、古来、茶杓の名手としての名が高い。下削りを使わないその茶杓には定型がなく、筒書きの天衣無縫な筆跡に人気がある。

本作の杓は、太い白竹の本樋（枝の跡がない節から発する樋）の部分その材とした、節下の短い、下がり節の杓。櫛先は短めで、丸く削られ、撓めは浅く、はっきりとした折撓めとしている。全体は、撓めから切止まで、ほぼ、真っ直ぐに削られた飾り気のない形をしているが、側面の姿には、きりとした撓めと、ザクザクと削った肉厚の杓裏に、切れ味の鋭い斧のような力強さを感じる。まさしく「カマキリ」という名にふさわしい杓といえよう。

一方、共筒は、杓と同じ白竹を用い、筒を八角の面取りに削っている。その正面には「（メ印） カマキリ 普斎（花押）」と記し、「蜻蛉の」ではじまる狂歌が一首、筒の側面から裏側に掛けて書き付けられている。木村定三氏も、このユーモラスな茶杓がお気に入りであったのか、再三茶会で使用している。書付と墨色にやや疑問は残るものの、普斎らしい楽しい茶杓である。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱箱裏墨書）「杉木普斎作茶匙銘蜻蛉筒狂歌アリ/玄々斎箱極/今日主（淡々斎花押か）（中箱蓋裏朱漆）「杉木普斎作茶杓/銘蜻蛉筒狂歌アリ/玄々（玄々斎花押）（共筒）「カマキリ 普斎（普斎花押）/蜻蛉のおのれはよしと思へとも/茶道流者は嘸おかしから」

精中宗室玄々斎（1810～1877年）は裏千家11代。「今日主」とは「今日庵の主」の意と思われる。今日庵は裏千家の代名詞と言える。（編者）



杓（正面）



杓（側面）



共筒



中箱蓋裏

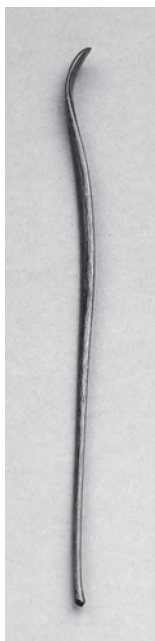


外箱蓋裏

8 ^{すぎきふさい}
杉木普斎
^{すぎきふさいちやしゃく めいすいせん}
杉木普斎茶杓 銘水仙



杓（正面）



杓（側面）

江戸時代前期 17世紀

竹造（変わり竹）

全長19.40 幅0.48～1.14 重さ3.25 1本

M2491-1 JA200300868001

（該当なし）

墨流しのような、大変美しい景色のある竹で削られた茶杓である。竹は苦竹の浸み竹で、おそらく、竹林にあるうちに水分が節から浸み込み、このような斑紋が浮き出たのであろう。普斎は、竹林でねじれて生えていたらしい竹の歪みを利用して、これを水仙に見立て、節を切止に置く、節切の真の茶杓として見事に削り上げている。普斎としては珍しいほどきれいに削っている。あるいは削りは人に任せただりかも知れない。

その一方で、共筒には普斎らしさが横溢している。ザックリとした刀跡が残る真削りの筒と、意外なほど長い詰蓋や、濃い墨をたっぷり中含ませた筆で、「(メ印) 水仙 普斎 (花押)」と書き付け、筒に一言認めた个性的で力強い筆跡など、常識に捉われぬ心のままの表現がなされた見事な筒といつてよいだろう。

ちなみに、本作は、裏千家と関わりの深い、茶事評論家・佐々木三昧（1893～1969）の旧蔵である。（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（箱蓋表貼紙墨書）「普斎茶杓 共筒/水仙 哥銘」
「朱文方印（三昧□□蔵）」（外箱側面貼紙墨書）「普斎/茶杓/水仙/哥銘」（箱蓋裏墨書）「水仙/普斎作」（共筒墨書）「水仙/普斎/廓公にあ□□□の/小□□」（箱内紙片）「佐々木/三昧氏ヨリ横浜村山家/水影の高島家旧蔵」 風呂敷に定三氏の「普斎茶杓/銘/水仙」墨書



共筒



^{たてしまちようまぜおりちやしゃくつつぎれ}
縦縞模様交織茶杓筒裂

江戸時代後期 19世紀

経糸 絹（鼠・赤） 緯糸 木綿（鼠）

全長23 幅5

M2491-2 JA200300868002

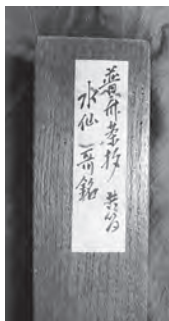
^{うすちやじきくからくさちようさらさほうれつ}
薄茶地菊唐草模様更紗包裂

江戸～明治時代 19世紀

更紗

全長60 幅39

M2491-3 JA200300868003



蓋表



蓋表



蓋裏

9 杉木普斎

すぎきふさい
杉木普斎茶杓 銘カチカチ山

江戸時代前期 17世紀

竹造（白竹）

全長18.00 幅0.62～1.17 重さ2.40 1本

M2486 JA200300263000

1947（昭和22）年（普斎茶杓 共箱 銘「かちかち山」 子供の日茶会「ディズニールランド茶会」に使用 普斎茶杓「カチカチ山」の外箱（古杉持参）
1974（昭和49）年）

普斎の茶杓に定型がないことは先に述べた。写真を見ておわりの通り、本作の杓も、普斎作の前二作、いずれとも異なる。利休をはじめとする千家の茶杓に近く、茶道の師・宗旦の茶杓を手本にしたような姿である。宗旦存命中の、普斎が30歳以前の作と考えられる。

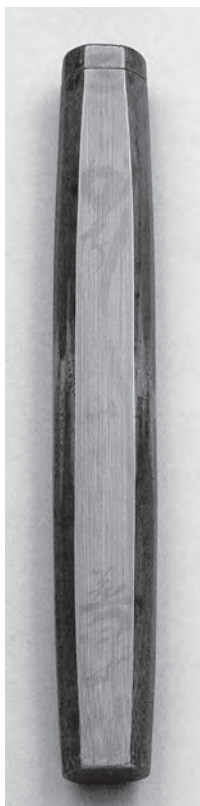
さて、本杓の材は本極の白竹。中節の辺りから表皮がそげ落ち、いわゆる腰裏といって茶人が喜ぶ竹が使われている。この竹は、權先は丸く、左肩下がりになり削り、直腰で、節下は杓裏を四角く面を取るように削られている。また、共筒は、胡麻竹を用いて、その上下を細くした紡錘形とし、正面の書付面以外は、皮目を筒中央に残した行削りとしている。簡潔に言えば、以上述べたこの茶杓の特徴は、すべて宗旦の杓の特徴につながるのである。

ところで、銘の「カチカチ山」であるが、杓のソゲを、昔話の狸の背負った薪に見立てたのだろうか。同じ普斎作という「カマキリ」に似て、人を楽しませ、驚かせるのが好きな木村氏にふさわしい、ユーモアのある銘の茶杓である。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱蓋覆紙定三氏墨書）「普斎茶杓/カチカチ山」
（中箱蓋裏墨書）「普斎作茶杓/一寸庵」 （共筒墨書）
「かちかち山 普斎」 風呂敷に定三氏の「共筒/普斎茶杓/銘/カチカチ山」

手帳の記録から、外箱は定三氏が1974年に自ら材料を調達し、誂えたことがわかる。



共筒



杓（正面）



杓（側面）



中箱蓋裏

10 げんそうそうさ かくかくさい
原叟宗左 (覚々斎)
かくかくさいげんそうそうさちやく めいゆめのよわい
覚々斎原叟宗左茶杓 銘亀齡

江戸時代中期 18世紀

竹造 (白竹)

全長18.50 幅0.75~1.20 重さ3.68 1本
M2489-1 JA200300266001

1946 (昭和21) 年 (共筒 茶会に使用
外箱書付即中斎 外筒庄 24.6)

覚々斎原叟 (1678~1730) は、江戸時代中期の茶人。久田宗全の子として生まれ、宗全の弟、表千家5代・随流斎の養子となって6代家元を継いだ。そして、覚々斎の時代に千家は隆盛の時を迎えたのである。覚々斎の手造りの茶道具を求める者は相次いでいた。その機運を受けてか、覚々斎の茶杓にはどれも自信があふれ、勢いが漲っている。

本作には、本樋で直腰の白竹を用いている。樋は深く、広い。その樋を折撓め、櫛先は剣先形に削る。幅が杓の末まで広く、肉厚な杓であるために、ほとんど削っていないかと思えるほどである。覚々斎らしい、堂々とした杓である。

共筒は、覚々斎に多い真削り。筒正面に「(印判)かめのよはひ 覚々 (花押)」と記す、その筆跡が見所である。

名古屋の豪商・河村曲全 (1679~1761) や、高田太郎庵が覚々斎に茶を学び、また、松尾宗二 (1677~1752) はその高弟として尾張に表千家の茶を伝えるなど、覚々斎と尾張・名古屋との関わりは深い。こうした所縁からか、木村定三氏は、本作を一度ならず茶会で使用している。

(池田 2014年発行「茶道具」より再録)

(外箱蓋裏墨書)「覚々共筒茶杓銘か免のよはひ (即中斎花押)」(共筒墨書)「か免のよはひ 覚々 (覚々斎花押)」 風呂敷に定三氏の「即中箱/原叟共筒/銘亀齡」墨書

無盡宗左即中斎 (1901~1979) 表千家13代。手帳の記録の末尾は他の記録との比較から箱の発注記録と推定される。「昭和24 (1949) 年6月」に定三氏により箱が作られたとすると、即中斎の箱書きは、定三氏からの直接の依頼によるものと考えられる。

たてしまからはなちようきんらんちやくふくろ
縦縞唐花模様金欄茶杓袋

江戸~明治時代 19世紀

金欄

全長19 幅2
M2489-2 JA200300866002

うすちやくじきくかはなびしちようどんすちやくつつふろ
薄茶地菊花花菱模様綴子茶杓筒袋

江戸時代後期 19世紀

綴子

全長23 幅4
M2489-3 JA200300866003



共筒



杓 (正面)



杓 (側面)



外箱蓋裏

11 ^{てんねんそうさ}天然宗左（如心斎）
^{じょしんさいてんねんそうさちやくめいよこぶえ}如心斎天然宗左茶杓 銘ヨコ笛

江戸時代中期 18世紀

竹造（白竹、樋竹）

全長19.00 幅0.76～0.97 重さ3.38 1本

M2835 JA200300896000

1947（昭和22）年（如心斎共筒茶杓

銘「横笛」一燈箱 外箱即中書付

外箱庄（24.6）ひなノ節句茶会に使用セリ。）

表千家7代目の如心斎天然（1705～51）は、江戸時代中期に、家元制度を確立し、「七事式」を制定するなどの改革を行い、「千家中興の祖」と呼ばれた茶人である。また、急増する門人のために、多くの好み物、手づくねの茶道具を残しており、茶杓もそのひとつで、如心斎の茶杓には、その当時から現在に至るまで、根強い人気がある。

本作は、父親の覚々斎の茶杓をさらに発展させたような茶杓である。直腰で本樋の白竹を用い、櫛先は剣先形（前にもあり）に削り、撓めは浅い折撓め。幅は、杓の末まで変化が少なく、肉厚である。この杓は、流祖の利休の作と比べると、ほとんど削っていないかのように見えるが、逆に、竹の素材感は見事なほど生かされているのは確かである。新しい時代の方向性を示した作といえよう。

また、共筒には、杓とは異なる胡麻竹を用い、行削りとし、これも肉厚に削る。その正面に「(印判)ヨコ笛 左(花押)」と記す。笛竹のこと、あるいは、祇園祭の囃子の音をあらわすのであろうか。この茶杓も、木村定三氏のお気に入りであったのか、茶会で一度ならず使用されている。

(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

(外箱蓋裏墨書)「如心共筒茶杓/銘ヨコ笛/一燈箱極(即中斎花押)」(中箱蓋覆墨書)「如心斎茶杓共筒一燈はこ極」(中箱蓋裏墨書)「天然茶杓/共筒/銘ヨコ笛(一燈斎花押)」

(三通の極が附属)

①(一燈斎極)「極」「□□□ 如心斎共筒茶杓/銘ヨコ笛 箱書付 一燈宗室」

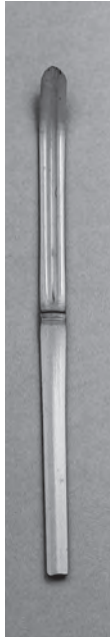
②(即中斎極)「古筆了仲」「如心斎宗左作茶杓/共筒銘ヨコ笛名判/有之一燈宗室箱蓋/極書有判各正筆/相違無之候也 子十二月」

③(極)「副筒」「□立/茶杓拝見(以後判読できず)」(共筒)「ヨコ笛」風呂敷に定三氏の「一燈箱極/即中外箱/如心斎茶杓/銘/ヨコ笛/横笛」ペン書

一燈宗室又玄斎（1719～1771）は裏千家8代目であり、如心斎の実弟。手帳の記録から外箱は定三氏が「昭和24（1949）年6月」に誂え、即中斎に箱書きを依頼したものと考えられる。日付からN0.9《杉木普斎茶杓 銘かち山》と同じ時に依頼したものと推定できる。（編者）



共筒



杓（正面）



杓（側面）



中箱蓋裏



中箱蓋覆



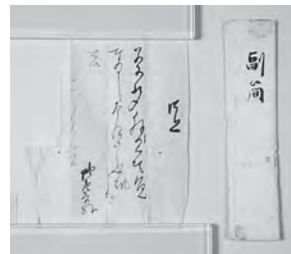
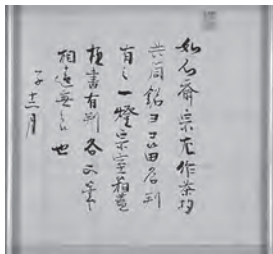
外箱蓋裏



一燈斎極



即中斎極



極（書者不明）

ひさだそうや
12 久田宗也（不及斎）
ひさだそうやちやしやく ぬいかんざんじつく
久田宗也茶杓 銘寒山拾得

江戸時代中期 18世紀
竹造（ゴマ竹）
2本（共筒、中箱、外箱付）
M2490 JA200300867000

1947（昭和22）年（宗也共筒茶杓 宗全の次男
宗也は原叟の弟なり。寒山（細） 拾得 宗参箱
外箱 耕甫）

久田宗也（1681～1744）は京都の茶家・久田家の
4代目の当主で、3代・宗全（1647～1707）の弟の
子。茶を伯父の宗全と覚々斎に師事したという。
「寒山拾得」とは、中国・唐時代の奇僧寒山と、
その分身の拾得を描いた道釈画の画題で、一幅対で
茶会の掛物としてよく見受ける絵画である。本作も、
この例を手本として、「寒山」「十（拾）得」それぞ
れの茶杓が、銘によってひとつに併せられたもので
ある。

茶杓を見ると、杓と共筒には、同じような胡麻竹
が用いられている。杓の竹は、どちらも本樋、そし
て直腰であり、形状も大変似ている。ただ「寒山」
は竹の色味が深く、「十得」は明るく見えるが、紡
錘形に削られた筒の姿もほぼ同一といえる。
（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

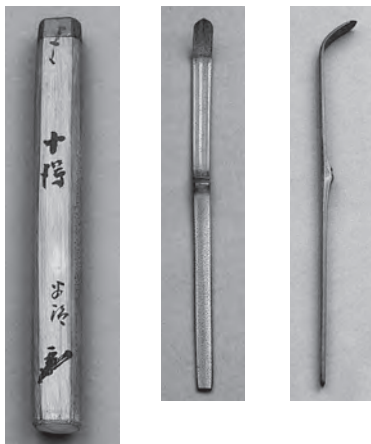
（外箱蓋覆定三氏墨書）「宗也茶杓/耕甫外箱/寒山
/拾得/宗参箱」（外箱蓋裏墨書）「共筒/半庵宗也作
茶杓/二本/銘寒山 拾得/箱書付 宗参筆/外箱極耕
甫筆 宗也（宗也花押）」（中箱蓋表墨書）「半庵宗
也作茶匙 二本入」（中箱蓋裏墨書）「寒山拾得
共筒/箱宗参記/半庵庵耕（耕甫花押）（寒山内箱蓋
表）「宗也作茶杓共筒」（内箱蓋裏）「祖父造 寒山
劣孫参（宗参花押）」（寒山共筒）「寒山 不及斎
（宗也花押）」（拾得内箱蓋表墨書）「茶杓 宗也」
（内箱蓋裏）「祖父作茶杓共筒 銘十得 宗参（宗参
花押）」（共筒墨書）「十得 宗也（宗也花押）」

個々の中箱に「祖父作」と記しているのは、茶杓
の作者久田宗也の孫・両替町久田家6代の宗参（1765
～1814）であり、その中箱を納める箱に「箱書宗参
記」と墨書しているのは、宗参の養子・耕甫（1752
～1820）である。さらにその外箱に、宗参と耕甫の
箱書が存在を書き記しているのは、高倉久田家7代
の維妙宗也（1767～1819）であり、茶杓の作者のひ
孫にあたる。（編者）



内箱蓋表 内箱蓋裏

（寒山）全長18.00
幅0.68～0.90 重さ2.71
M2490-1 JA200300867001



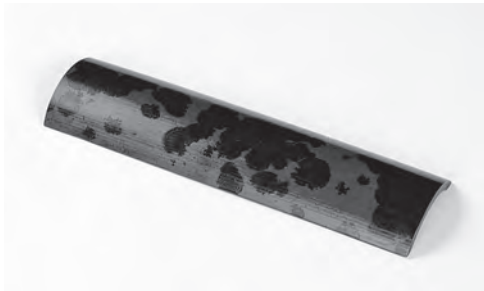
内箱蓋表 内箱蓋裏

（拾得）全長17.90
幅0.75～0.93 重さ2.53
M2490-2 JA200300867002



中箱蓋表 中箱蓋裏 外箱蓋裏

はんちくせんばい



内箱蓋表

竹造(斑竹)
全長20.2 幅5.7 高1.7 肉厚0.6
重量54.46

M2836 FA200300286000

1947 (昭和22) 年 (斑竹茶合 根津家旧蔵)

仙奴とは茶合ともいい、茶葉を茶心壺から急須に移す時に使う、煎茶道具の一つである。仙奴には、竹や木、銀、銅製のものがあるが、ことに竹には丈夫で軽く、内側に空洞があるので、割って使えば、そのまゝ茶を乗せることが出来る。本作では、日本ではあまり採取出来ない斑竹を用いているのが特徴で、斑竹は湘妃竹ともいい、中国古代の伝説よりその名がある。(池田)

(外箱側面貼紙墨書)「唐物斑竹□合」(內箱蓋表)
「湘妃斑文竹僊媒/秋雨喤榭珍藏/癸己嘉平月/竹□老
人觀並題

中国湖南省の九嶷山に多く群生する斑竹を「湘妃竹」もしくは「淚竹」と呼ぶ。
(編者)

炭取



箱蓋表

14 一閑斎
いつかんさい
そうぜんだつまかごすみとり
宗全達磨籠炭取

いっかんさい

一閑齋

そうぜんだつまかごすみとり
宗全達磨籠炭取

江戸時代中期 18世紀

籐 網代・山道編

総高8.2 口径27.5 底面11.0角 1口

M1538 JA200300642000

(該当なし)

千利休が所持した籠炭取に「達磨籠炭取」があるが、本作はおそらく、その利休の炭取をもとに、久田宗全が新たに好んだものだろう。使用している材料（女竹）も底編みから籠の立ち上がり部分までの編み方も全く同じである。ただし、本作は浅い盆型をしていて、利休の「達磨籠」の下半分だけを書したかのように、上から見ると、明らかに形が異なるのが面白い。本作は宗全の考えた籠炭取を、その下職である飛來一発が編んだものと思われる。

（池田 2014 年発行『茶道具』より再録）

(外箱蓋覆紙定三墨書)「宗全達磨灰取」(外箱覆紙鉛筆)「木村様ビルマ仏」(外箱蓋表墨書)「タツマ/炭斗」(外箱身側面貼紙墨書2枚)「達□/炭□」「宗全達磨/炭斗」(朱書)「大拾三番」 風呂敷に定三氏の「宗全達磨/灰取」墨書

すきかわすみとり
15 杉皮炭取



江戸時代中期 18世紀
杉 ヘギ細工
総高11.4 口径26.7 1口
M1541 JA200300644000

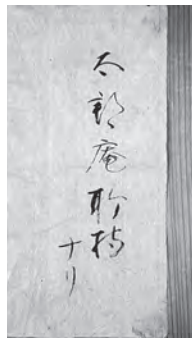
1951(昭和26)年 (太郎庵在判 杉皮炭斗)

表千家6代の覚々斎宗左に茶を学び、名古屋にその茶風を伝えた茶人、高田太郎庵(1683~1764)が所持した炭取であることが、木村定三のコレクションに入る理由のひとつであったことは疑いない。しかし、さすがに太郎庵所持の籠炭取といえる、茶味にあふれた趣がある。杉のヘギ(木材を薄く、板状に剥いだもの)を使い、貼り合わせた、野趣のある姿は木曾・飛騨・東北などの民芸品を思わせる。口縁にもヘギを使い、藤で荒く止める。その作為を感じさせないざっくりとした姿に、侘び茶に徹した太郎庵の力量を見る思いがする。
(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

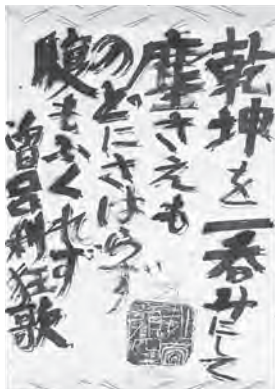
(外箱蓋裏貼紙墨書)「太郎庵取持ナリ」(外箱側面貼紙4枚)「三六 朱文円印「不明」」「太郎庵在判 杉皮炭取」「□炭取」「□□□□」(本体底面朱書)「太郎庵/花押」 風呂敷に定三氏の「在印/太郎庵/杉皮炭斗」墨書



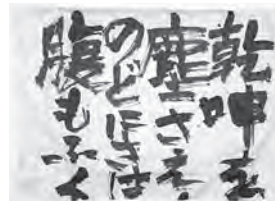
底



蓋裏貼紙



(参考)
須田剋太《曾呂利狂歌》
1987年作 紙本墨書 掛幅装
愛知県美術館蔵
木村定三コレクション M2095



箱の底に書の断片が敷かれていた。《曾呂利狂歌》木村定三コレクション M2095の上半分と内容が同じである。1995年の大鵬茶会の時に、定三氏は「乾坤庵永劫斎」と名乗り、寄付に《曾呂利狂歌》を飾っていることが、同茶会記録からわかる。同茶会記録では炭取は記載されておらず、この炭取が使用されたかどうかは定かではない。 (編者)

くろうしぬりかご かごじとうじんかさ
16 黒漆塗籠（籠地 唐人笠）



中国南部 江戸時代中期 18世紀
 籐 二本組網代編 漆塗
 総高18.0 口径29.0 底面10.0角 1口
 M1544 JA200300647000
 1947（昭和22）年（真塗大盧縁 箱ヲ古伊万里龍
 宮圖大皿ニ用フ）

唐物籠炭取の古い時代のものは、そのほとんどが見立てである。中国や東南アジアから我が国へ渡来した、野菜や点心の器、食籠や農具のなかから、炭を組むのに適した籠が選ばれている。本作もこうした転用による籠炭取である。

その姿は、笠というよりは、帽子を逆さまにしたような形といったほうが近いだろうか。素材は、籐（ラタン）の表皮。その天辺を削り、幅を揃えたものを用いて底を網代に組んで立ち上げ、外に開き、鐙の部分には、おそらく籐の芯を入れて、包み込むように巻き上げている。全体に漆をかけてあるのは、笠の防水のために施されたものと思われる。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱蓋表貼紙墨書）「籠地/唐人笠」（外箱側面貼紙墨書）「籠地/唐人笠」

しゅじきんさいほうおうずすみかご
17 朱地金彩鳳凰図炭籠



タイ国 18世紀頃
 竹・漆 藍胎漆器
 総高（突起含む）16.6（口高）5.0
 口径28.5 底面16.6角 1口
 M1543 JA200300646000
 1980（昭和55）年（タイ 籠地朱地金彩鳳凰図炭
 取り 見込み黒地に「朱」の丸あり）。

本作は木村定三氏の眼力による、見立ての炭取ではなかろうか。異国情緒あふれる、エキゾチックないわゆる藍胎漆器である。朱で塗られた胴体には、金箔で鳳凰と植物が描かれており、大変美しい。籠地も凝っていて、外と内とで編み方を変えた二重編みである。また、口縁にある、相対した突起は、本体を吊るすためのものと思われる。本作は雑器として作られたものではなく、なにかの容器として、宮廷などで吊るして使われたものではないだろうか。（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（外箱側面に写真貼付） 風呂敷に定三氏の「朱地金彩/鳳凰図墨籠」墨書

からものむつめあみおすみとり
18 唐物六ツ目網大炭取



江戸時代中期 18世紀
 竹 六つ目くずし
 総高7.0 口径34.8~35.7 1口
 M1539 FA200300144000
 1950（昭和25）年（唐物夏籠炭斗 黒塗）

とびぬけて大型の籠炭取であり、その姿に、木村定三氏の好む、型にはまらぬ魅力がある。いわゆる菜籠の形であり、いかにも台所で野菜などを盛るのにふさわしい。もともと雑器であるが、野趣のある炭取として見立てられたのであろう。ただ、唐物とされているが、その造形や編み、材料からは、和物

籠とも思える。材料は苦竹で、その表皮を削って面取りとした材料を使い、六つ目くずしという編み方で本体を組み、口縁は、幅の広い竹で縁をおさえ、籐で巻き付けている。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

箱側面貼紙2種 欠損多く判読できず。風呂敷に定三氏の「唐物/六ツ目編み/大炭取」墨書

ひさだそうぜんとうぐみすみとり
19 久田宗全籐組炭取



江戸時代前期 17世紀

籐 芭蕉編

総高16.4 口径17.5~21.0 底径19.3~20.5

1口

M2617 JA200300886000

1946 (昭和21) 年 「唐物炭斗」 深シ 箱書ニハ
久田宗全作トアリ)

久田宗全 (1647~1707) は、千宗旦 (1578~1658) の娘・くれと久田宗利の間に生まれた。表千家5代の随流斎 (1650~91) の兄であり、同6代の覚々斎 (1678~1730) はその長男である。晩年は三千家に重きをなし、千家と深い関わりを持つ茶人であった。また、宗全は樂茶碗や茶杓をはじめとし、数多くの茶道具に自作の優品を残したことでも知られる。ことに籠の作品を手掛けたことは、特記すべきことといえるだろう。籠ものまでを手造りした茶匠はあまり多くはないのだ。

さて、本作を見てみよう。本作は籐のみで編まれている。籐 (ラタン) は輸入材料であり、この炭取が制作されたとされる時代 (江戸時代前期) の鎖国の状況においては、大変貴重な素材でつくられたことになる。本作の使用材は、籐の表皮を剥いだもので、使われた籐の直径は5cm位だろうか。この籐を網代編みで籠の底を作り、補強材を入れて立ち上げ、籠の側面は芭蕉編みとしている。最後に蛇腹編みで口を編み、籠の内部には和紙を貼って、漆を塗って仕上げている。炭取としては深めであり、表千家では炉用の炭取として使われるものである。

ところで、本作の作者について、籠に添う杉箱の蓋表に「籐組炭取 久田宗全作 一閑内張り」とあるが、同じ箱の側面には「宗全好籐組炭取 一閑斎作」ともあり、「宗全作」か「一閑斎作」かが判然としていない。ただし、本作の手際の優れた仕事振りは、職方の作とした方が納得がいく。なお、「一閑斎」とは、千家十職の一家、「飛来一閑」のことではないだろうか。

(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

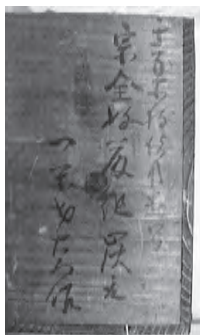
(箱蓋表)「久田宗全作/一閑内貼り 籐組炭取」
(箱側面)「千家所持ノ古写/宗全好籐組炭斗/一閑□□作」
(箱側面)「千家所持使用五号/宗全好籐組炭斗/一閑□□□作」



蓋表上



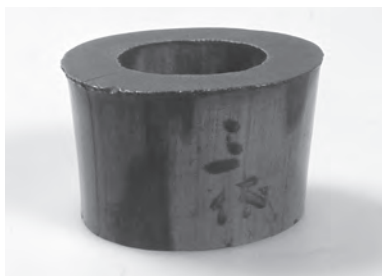
蓋表下



箱側面



その他



上部



銘



花押



箱蓋表

20 伝杉木普斎 竹蓋置 銘三休

不明

竹

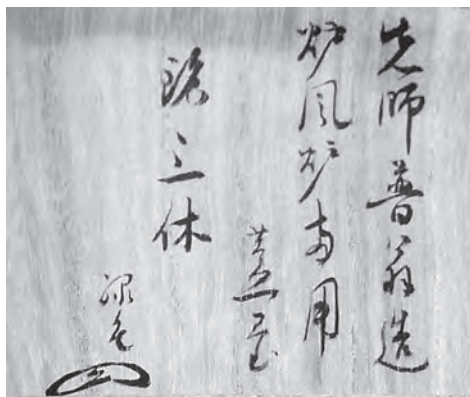
高5.3 径8.4 1個

M1434 JA200300568000

1946（昭和21）年（銘「三休」直書付「三休」とは蓋置のこととも云う。大鵬茶会に使用）

（箱蓋覆墨書）「普斎/竹蓋置」（箱蓋表墨書）（□□□□/竹□蓋□）（箱蓋裏墨書）「先師普翁造/炉風炉両用/蓋置/銘三休/□□（不明花押）」（箱側面貼紙墨書）「式十三□ 朱文印」 風呂敷に定三氏の「普斎/竹蓋置/銘三休」墨書

胴部側面に「三休/（普斎花押）」と朱書き。上部は節ぎりぎりでは節側を残さぬよう切断している。胴部の書を除いて、竹に手を加えた部分は、上下2か所の切断だけである。よって作者の同定は今後の書跡としての調査結果をまちたい。（編者）



箱蓋裏

21 でんふじむらようけん
伝藤村庸軒
たけふたおき めいし おひ
竹蓋置 銘汐干



不明

竹

高4.9 径5.1 1個

M1433 JA200300567000

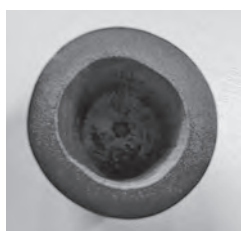
1947（昭和22）年（竹の蓋置「汐干」詩朱書 茶会に使用）

（箱蓋表墨書）「庸軒蓋置」（箱身側面貼紙墨書）
「庸軒蓋置」（貼紙朱書）「□二半ノ□」（紐付札表）
「潮干 詩有/蓋置」（札裏）「庸軒作」

胴部側面に「汐干/永和三/日□/輕舟/□□句」と朱漆書き。胴部の書を除いて竹に手を加えた部分は、上下2か所の切断だけである。よって作者の同定は今後の書跡としての調査結果をまちたい。（編者）



上部



底



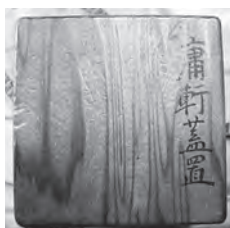
花押



歌



銘



箱蓋表



札

22 陽刻楼閣山水図巾筒
ようこうろうかくさんすいずきんとう

中国・清朝後期 19-20世紀

竹彫刻

高5.2 直径3.4~3.7 肉厚0.4 重量15.97

1個

M2224 FA200300199000

1965（昭和40）年（お竹山水彫巾筒）

煎茶道は黄檗山・万福寺の開祖、隠元隆琦（1592～1673）にはじまるとされている。しかし、本当の意味で煎茶が盛んになるのは、江戸時代中期に、緑茶の新しい製法が開発され、末期に玉露が考案されてからのことである。そして、明治時代にかけて茶道を凌ぐ流行をみせた。こうした煎茶の流行は文人趣味の煎茶道具の需要につながり、数多くの作品が生まれ、また中国からもたらされたのである。

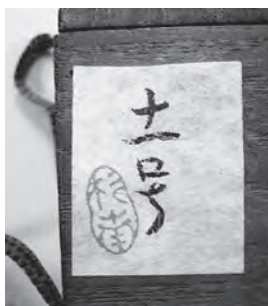
本作は、江戸時代後期に清朝から輸入されたと思われる、煎茶道の点前に用いられる巾筒である。箱の貼り紙には「古竹山水巾筒」とある。竹は、伐ってから時間が経つとともにしだいに水分が抜け硬質になるが、本作は、この古竹の表皮を剥ぎ、彫刻刀で山水・楼閣・人物などを立体的に彫り込んでいる。失敗の許されない、非常に骨の折れる仕事である。

（池田）

（外箱側面貼紙墨書）「古竹山水彫巾筒/井イ/朱文長方印「□□」」（外箱側面貼紙墨書）「十一号/朱文楕円印「杉甫」」 風呂敷に定三氏の「竹彫/山水巾筒」ペン書



箱側面





杵
木
普
斎
自
在
狂
歌

鍵
山
田
亀
斎
作
書
付

三
松
菴
常
付

箱蓋表

23 伝杉木普斎

狂歌入自在

不明

全長140.6 棹長136.0 棹径（上部）2.6

1本

M2208 JA200300787000

1948（昭和23）年（狂歌入竹自在）

（箱蓋表墨書）「杉木普斎 自在 狂歌/鍵 山田
亀斎作書付 三松庵常付」

作者の同定は今後の光学調査および書跡の調査結果をまちたい。山田亀斎について詳細は分からなかったが、2代目有麦庵（普斎の号）とするものもある。三松庵についても不明。（編者）

24 伝原叟宗左（覚々斎）

かくかくさいかきつけ ばんせきしっぺい
覚々斎書付 盤石竹筥

全長82.0 幅最大3.0 最少 2.2 厚さ0.8～1.2

重さ99.0 1本

M2207 JA200300786000

（該当なし）

竹筥とは、禅宗で、師が参禅者を悟りに導くために 打ち驚かせて指導するために使う仏具である。本来は、割竹を弓形に曲げ、籐を巻き漆を塗ったものなので、漆筥、つまり「しっぺい」と呼ぶようになった。本作は、苦竹の白竹で作られている。竹は四節の白竹で、筥の中段に覚々斎の書体で「盤石」、先のほうに花押が彫り込まれ、色漆によって彩色されている。竹筥の元のほうに組み紐が付いているのは、この筥を茶席の柱に掛けて飾るためのものである。ただし、この竹筥の竹は新しく、覚々斎の時代のものではない。（池田）

（箱蓋裏紙墨書）「覚々斎書付盤石竹筥 惺斎箱書付」（箱蓋裏墨書）「竹筥 覚々書付盤石トアリ」（箱側面墨書）「竹/志いべい」（貼紙墨書）「第貳一参號」（箱底部墨書）「竹筥」

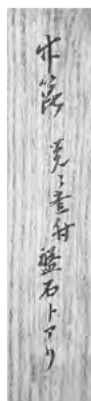
惺斎（1863～1937）は表千家12代



側面



花押



箱蓋裏



箱蓋裏花押

25 ^{かいぐ} ^{じだいちゃかご} 皆具のための時代茶籠

江戸時代後期 19世紀

竹 網代編

総高14.2 幅16.8 奥行13.2 1組

M1608 JA200300690000

(該当なし)



木村定三コレクションにある2点の茶籠皆具の内、本作は時代茶籠といえるものである。といっても時代がさほど古いという訳ではない。おそらく、江戸時代後期に中国から輸入されたものではなかろうか。孟宗竹の身を使い、荒く網代に組んだ底と、女竹で細かく網代に編んだ本体を組み立て、その上下を籐でとめている。蓋は、本体と同じ編み方で作り、孟宗竹で立ち上がりを付け、印籠蓋としている。収められた茶道具は、茶碗2、茶杓1、茶筌筒1、茶巾筒1などである。本作を含め、二点の茶籠皆具を見たが、そのどちらにも木村氏の存在を感じることはできなかった。

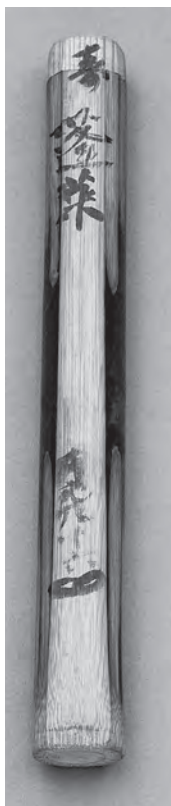
(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

(箱蓋表墨書)「籠茶筌 皆具」



籠内部

近代・現代



共筒



杓 (正面)



杓 (側面)



箱蓋表



箱蓋裏

26 松永安左工門

まつながやすざえもん

松永安左工門耳庵茶杓 銘「蓬萊」

まつながやすざえもんじあんちやく めいほうらい

1970 (昭和45) 年

竹造 (煤竹)

全長18.50 幅0.70~1.21 重さ3.23 1本

M2492 JA200300869000

1983 (昭和58) 年 (松永耳庵造共筒茶杓 銘「蓬萊」

共箱 茶会に使用 耳庵九十六 (耳庵は97才にて没))

松永安左工門 (1875~1971) こと松永耳庵は、1928 (昭和3) 年から1942 (昭和17) 年まで、名古屋を経営の基盤としていた東邦電力 (本社は東京) の社長および会長を務め、戦後は電力界の再編成を推し進めた。茶人としては、益田鈍翁の知遇を得て、茶に目覚め、財界茶人としても名を残している。

その耳庵は、数多くの茶杓を残しているが、自身で削ったものは、ほとんどない。また、それを隠そうともしなかった。耳庵の茶杓は、その共筒に残された筆跡に価値があるのである。本作は小田原在住の茶人の下削りと推定されるが、材は逆種・直腰の煤竹を使い、浅い撓め、匙状の權先、丸削られた切止などに特徴がある。共筒は、同じ煤竹の行削りで、その正面の書付面に耳庵が「寿 蓬萊 耳庵九十六 (花押)」と記した文字はやや読みにくい。残念なことに能筆の耳庵としては、筆に衰えが見える書付である。

この茶杓は、最晩年の作だろうか。とすれば、遺作に近いといえるかも知れない。耳庵は、1971 (昭和46) 年6月に97歳でなくなっている。

(池田 2014年発行『茶道具』より再録)

(箱蓋表墨書)「茶杓 耳庵作」(箱蓋裏墨書)「銘蓬萊 耳庵九十六 / (松永耳庵花押)」(共筒側面墨書)「寿 蓬萊 耳庵九十六 (花押) 風呂敷に定三氏の「耳庵茶杓/銘蓬萊」墨書

27 時代炭取



台湾か 20世紀初期

皮籐 梅花編み

総高12.4 口径約20.0 底面23.0角 1口

M1540 JA200300643000

1947（昭和22）年（径一尺一寸七分）

いわば、表千家でいう炉用の唐物籠炭取だが、本作は見立てではなく、その寸法や形から、明らかにはじめから炭取としてつくられたものであると考えられる。材料には籐の皮目を用いている。その籐皮で、梅花編みという珍しい手法で底から立ち上がりまで編み、口縁は、やはり籐を使って丁寧に編んでいる。どことなく台湾でつくられる籠に似ており、古びてはいるが、製作年代はさほど古くはないのではないだろうか。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

内部に1932（昭和7）年名古屋美術倶楽部買立票
風呂敷に定三氏の「時代/籐炭斗」墨書

28 長谷川甫斎

甫斎「八十八翁」鵜網釜敷



昭和時代前期 20世紀

縄 竹皮 巻き上げ技法

最大径13.8 厚0.7 1枚

M2307 JA200300821000

1979（昭和54）年（八十八翁 甫斎作 共箱 鵜網釜敷 鵜飼用の網を以て作る）。

この作品は、鵜飼に使用される網でつくられた、茶事に用いる組物釜敷である。共箱の蓋表には「鵜網釜敷 鵜飼用の鵜網以て作る 八十八翁 甫斎老（印判）」とある。その朱色の印判から、本作は名古屋における茶道の一流派である松尾流の指物師、長谷川甫斎の作と認められる。

甫斎は指物師として桐・杉などで茶具の箱をつくるほか、茶料の下割り師としても、戦前の名古屋の茶人にとって馴染み深い人物であった。名古屋の数寄者である森川如春庵や富田宗慶らのほか、益田鈍翁や高橋箒庵など、近代に偉大な足跡を遺した東都の茶人にも愛顧された職人である。

この一風変わった釜敷は、その甫斎の晩年の作である。寸法は、直径で13cm後半と、釜敷としては平均的な大きさ。材料には鵜飼で使う網紐を同心円状にして、竹の皮でその紐を放射状に止め、さらに釜敷の縁を巻いて口造りとしている。きれいに仕上げるというよりは、風情を求めてつくられた釜敷であると思われる。

（池田 2014年発行『茶道具』より再録）

（箱蓋表墨書）「鵜網釜敷/鵜飼用の鵜網以て作る/
八十八翁/甫斎老 朱文長円印「ホ」」

29 ^{とうぐみびんしょう} 藤組み瓶床 ^{ぬりだいつき} 塗台付



不明

籠地 藤 七宝編 /台 木 漆塗

総高3.2 径10.2 底径6.7/籠地のみ 高1.2

径9.0 1組

M1564 JA200300662000

1979 (昭和54) 年 (煎茶急須敷 藤編み

外に塗盃台付 径9榧 内径1.7榧 厚み0.3榧)

(箱側面貼紙)「藤組み/急須敷/NO.006645/ECE
(ED)」(箱側面貼紙墨書)「待合茶托」

轆轤引きの台は、中心に直径4.7cmの穴が空いている。箱の側面に「待合茶托」ともあるため、籠地を台に乗せた一組で、白湯用の茶托としても使用されたと考えられる。(編者)

30 ^{はやかわしょうこさい} 早川尚古斎 ^{よんだい} (四代)

^{ていりょううふ} 提梁烏府



1927 (昭和2) 年

竹造

総高12.5 外径16.5 1口

M1671 JA200300739000

1943 (昭和18) 年 (尚古斎 炭斗 煎茶用)

(外箱蓋表墨書)「烏府」(外箱蓋裏墨書)「昭和丁卯初夏/四世尚古斎造 朱方文印「第4世/尚古斎」(箱内部)領収書 尚古斎書簡各1通 (書簡は尚古斎にこれを発注した、定三氏以前の所有者に向けた礼状) (本体底面)「四世 尚古斎 造」風呂敷に定三氏の「尚古斎/烏府」墨書

烏府は炭取の別称。箱書に「昭和丁卯初夏」とあり、これは1927年と87年が該当する。しかし定三氏の入手記録が1943年であることから、本作は1927 (昭和2) 年の作であると判断した。(編者)



底



箱蓋表



箱蓋裏

31 古南部茶籠

不明

竹造漆塗

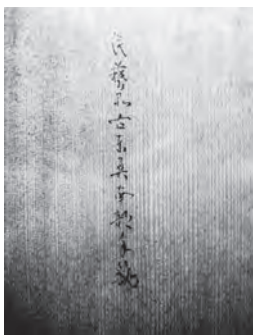
総高24.5 縦28.9 幅36.1 1合

M1451 JA200300580000

1946（昭和21）年（古南部茶籠）



（外箱蓋表墨書）「民藝品古東奥南部手籠」（外箱蓋裏墨書）「不斷華楼所蔵之内」（外箱側面貼紙）「古南部手籠/不斷華楼 對水藏/黒文方印「對水」2か所」（内箱蓋覆紙）「時代竹籠」（中箱蓋表墨書）「民藝品 國産古南部□籠/黒方長円印「不斷華楼」」（中箱蓋裏）「古趣横溢手澤如添/朱文方印「不斷華楼」/「こん古趣味の手籠らつい嗜好て/米山居にて求めた/不斷華楼主人 對水/黒文方印「對水」」 風呂敷に定三氏の「南部籠」墨書



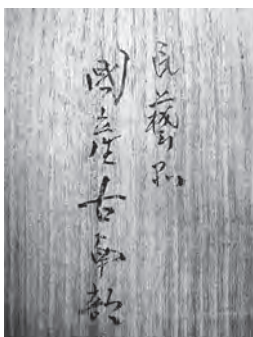
外箱蓋表



外箱蓋裏



外箱側面貼紙



中箱蓋表



中箱蓋裏

東北地方の民芸品が見立てられたと考えられる。箱書きに散見される「不斷華楼 對水」については、元大阪三越美術部長・清水真輔（1884～1942）の可能性がある。著書に『不斷華楼画趣』がある。箱書にはこれを茶籠として転用した記録はないが、定三氏の入手記録には「茶籠」とあり、定三氏の見立てを優先させる観点から名称は「古南部茶籠」とした。（編者）

32 たけあみひがしき 竹編干菓子器



不明

竹

縦47.4 幅25.2 柄(径) 2.3 1枚

M642 FA200300039000

1981(昭和56)年 (唐物箕菓子器 直径45.0㎝)

(短径25.0㎝ 団扇の形を写した文人趣味の気のきいた菓子器)

(箱蓋表墨書)「唐物箕」(箱中木札 表墨書)「唐物/箕」(木札裏墨書)「干菓子器」箱側面貼紙墨書「時代/唐物箕/干菓子器」

1981(昭和56)年、日本橋三越本店三越美術館で行われた「古美術茶道具展 茶美の会」で、「木村定三コレクション」と題した特集が組まれた。この菓子器はそこに出品されており、図録(愛知芸術文化センターアートライブラリー木村定三蔵書 コレクション番号K915)の解説では、手帳に書きこまれた文言と同じく「団扇の形を写した文人趣味の気のきいた菓子器です。」と紹介されている。この文が定三氏によるものか、主催者側の文言を、単に定三氏が手帳に写しただけなのかは不明である。(編者)

33 かいぐ ちゃかご 皆具のための茶籠



大正時代前後 20世紀

籐 巻き上げ技法

総高10.8 幅14.8 奥行11.0 1組

M1582 JA200300672000

1947(昭和22)年 (茶籠用 時代牙茶杓)

茶籠は、江戸時代中期頃から、花見遊山に使われる洒落た籠の弁当箱などに、茶人が茶道具一式を組み、携帯して楽しむようになったのが始まりだといわれている。諸大名や三井家などの名家が、旅持ちに使う蒔絵の茶箱より、気楽に旅先で茶を点てられることから広まり、現代に到るまで、茶籠に苦心して道具を組み込むのが、茶人のひとつの愉しみになっている。

本作もそうした茶籠であり、籐を材に用いた巻き上げ技法で、ていねいに編まれている。ただし、制作年代は、そんなに古くはない。おそらく、大正時代前後に中京で作られたものではないだろうか。なお、この籠に収められているのは、茶碗1、象牙茶杓2、塗茶筌筒1、南鐙巾筒1などである。

(池田 2014年発行『茶道具』より再録)



34 てつきかご 手付籠



大正から昭和時代 20世紀
 底部竹 籐編
 総高23.4 幅44.4 奥行27.0 1口
 M2396 FA200300054000
 (該当なし)

果物等の盛籠として製作されたものと考えられる。柄は針金の芯を持つ。安藤竹良斎作No.40《手籠花入 銘水すまし》(M1310)の本歌となった作品。
 (編者)

35 あやべきょううんさい 綾部経雲斎
 たけねおおすずりばこ 竹根大硯箱



昭和時代 20世紀
 竹 漆塗
 総高13.7 幅23.5 奥行23.5 1枚
 M2371 JA200300853000
 (該当なし)

(箱蓋表墨書)「漆仕上 □作 竹根大硯箱 経雲斎作/朱文円印「経」 (作品底面朱書)「経」

綾部経雲斎は大分県に1928(昭和3)年に生れる。竹工芸家・書刻家。上野公園の西郷隆盛像横の碑「敬天愛人」を刻んだ作家として知られる。
 (編者)

安藤竹良斎

1987(昭和62)年6月5日(金)から10日(水) 名古屋三越栄本店7階特設画廊で行われた「竹の美を求める 安藤竹良斎作品展」のパンフレットに木村定三氏が次のような文章を寄せている。

「仕事の鬼」安藤竹良斎

木村定三

凡そ茶道具の製作者の中で一番経済的に恵まれていないのは籠師かと思う。従って専門の籠師は全国で十指に満たない程の少数である。その主たる理由は、現代の茶道の習慣が籠は風炉の季節のみに使用するものとされ、その使用期間が短く焼物等の花生に比べて軽く扱われていることによる。

彼はそれを補うべく寝る間も惜しみ夜を日に継いで仕事に全力を集中している。恐らく彼の心中を察すれば一日が二十四時間でなく三十時間もあったならばと思っていることであろう。彼は師匠の竹朋斎に三年間師事し、その後独立して今年が六年目で現在三十八才である。達磨は面壁九年で悟りを開いたが、彼も当初より勉強九年の今回の個展は、従前のやや生硬の感のあった職人芸の作品から脱して「さんぐり」した作品が作れるようになって来た。私は之は「茶人芸」に入ってきたものと褒め大いに激励している。

山田宗偏が「桂川」と銘した花籠は、義士の吉良邸に討ち入りの日の茶会に使用されたものであることは衆知の事実である。時は真冬であることは論をまたない。願わくば世の宗匠方も利休の頃の自由な茶に帰り、四季を通じて似合うものならば、もっと籠を使用して頂きたい。当地には竹友斎、竹朋斎、竹良斎の三人もの籠師が揃っているからには、各自炉にも適する籠の製作に工夫をこらし、当地名古屋が籠の中興の地となることを祈念する次第です。

昭和六十二年四月二十一日記

1948(昭和23)年名古屋市に生れる。初個展で定三氏が作品を購入したことから、以後、親交を深めた。「安竹庵」は定三氏が命名。「作品が古びて見えることから「アンティーク」をもじった。ユーモアのある人だった」と安藤氏は語る。(2018年2月5日 編者聞き取り)

安藤竹良斎氏の作品調査については、安藤竹良斎氏と(株)茶道具商ながさか様にご教授頂きました。ここに記してお礼申し上げます。



36 安藤竹良斎 あんどうちくりょうさい 桂籠

1982(昭和57)年

竹 漆塗

総高21.0 胴径20.0 一口

M1308 JA200300471000

1982(昭和57)年(竹良斎 籠花王「桂川」)

(箱側面墨書)「桂籠 竹良斎/黒文方印「竹良斎」
(紙片定三墨書)「竹良斎「桂川」華籠」 風呂敷に
定三氏の「竹良斎 桂川籠 定」墨書



千利休が京都の桂川の漁師から魚籠を譲り受けて、花入に見立てたものが、少庵、宗旦、そして山田宗偏らの手を経て、今も香雪美術館に伝わっている。これが《利休 籠花入 銘桂川》である。後に赤穂浪士の討入に大きく関わることになる。この花入の編み上げ手順および形状を真似た竹籠を、桂籠もしくは桂川籠と呼ぶ。(編者)



37 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
からものうつしただけくみてつきかごはないれ
唐物写竹組手付籠花入

1987（昭和62）年
竹 籐 銅 漆
総高59.5 身高28.4 幅30.0 奥行24.5 一口
M1307 JA200300470000
（該当なし）

（箱側面墨書）「唐物写 竹組手付籠/竹良斎/黒文
方印「竹良斎」」（蓋覆紙貼紙）該当作品写真（附
属物）1987（昭和62）年6月個展案内 封書、年譜
風呂敷に定三氏の「六十二年作 竹良斎うつし花籠」
墨書



38 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
からものうつしなんさんだまたけかごはないれ
唐物写南京玉竹籠花入

1992（平成4）年
竹 南京玉 漆
総高43.0 幅23.5 奥行19.7 一口
M1306 JA200300469000
（該当なし）

（箱側面墨書）「唐物写 南京玉付籠花入/竹良斎/
朱文方印「竹良斎」」（附属物）1992（平成4）年6
月 個展案内葉書（当該作品掲載）



39 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
からものうつしとうぐみでつけすねあてかご
唐物写籐組手付脛当籠

1992（平成4）年
竹 籐 漆
総高39.0 身高16.8 幅28.5 奥行24.0 一口
M1309 JA200300472000
（該当なし）

（箱側面）「唐物写 籐組手付脛当籠/竹良斎/黒文
方印「竹良斎」」（包裂）「朱文方印「安竹庵」」 風
呂敷に定三氏の「竹良斎/唐物寫 籐組手付脛当籠/
定」墨書

脛当は甲冑一揃の一部で脛の防具。幅広の籐の折
り曲げ部分が似ていることからこう呼ばれ、5月の
節句の頃に使用されることが多い。
（2018年2月5日安藤氏より。編者聞取）



40 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
すみり
炭斗

1992（平成4）年
籐
総高12.8 径28.4 一口
M1542 JA200300645000
（該当なし）

（箱側面墨書）「唐物写/籐組炭斗/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」 風呂敷に定三氏の「唐物写し/籐組炭斗/竹良斎」墨書

No.27《時代炭取》M1540の写し。定三氏に「写してみたら」と提案され製作した。
（2018年2月5日安藤氏より。編者聞取）



41 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
からものうつしとうぐみひさごがたはないれ
唐物写籐組瓢形花入

1992（平成4）年
竹 籐 漆
総高25.4 幅16.3 奥行15.6 一口
M1311 JA200300474000
（該当なし）

（箱側面）「唐物写籐組瓢形筥」（作品底面刻印）
「安竹」（包裂）「朱文方印「安竹庵」」

No.40《炭斗》の製作後、そこで修得した編み方を応用して製作した。
（2018年2月5日安藤氏より。編者聞取）



42 あんどうちくりようさい
安藤竹良斎
せみかご
蟬籠

1992（平成4）年
竹 籐 漆
総高38.5 幅17.5 奥行17.0 一口
M1312 JA200300475000
（該当なし）

（箱側面）「蟬籠/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」（蓋覆紙）「竹良斎 蟬籠」

掛花入。久田全が好んだと言われている。床柱に掛けた様子が蟬に似ていることから名が付いたと言われている。
（編者）



43 あんどうちくりょうさい
安藤竹良斎
ななかご
鉦籠

1992（平成4）年

籐 漆

総高25.8 幅18.2 奥行12.2 一口

M1313 JA200300476000

（該当なし）

（箱側面）「鉦籠/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」（包裂）「朱文方印「安竹庵」」（附属物）年譜1枚 風呂敷に定三氏の「竹良斎/鉦籠/定」墨書

鉦籠は千利休が、鉦を入れ腰からぶら下げる袋を花生に見立てたのが最初であると言われている。通常、壁や柱に掛けた状態で使用される。（編者）



44 あんどうちくりょうさい
安藤竹良斎
はなごめいのべのさと
花籠 銘野辺の里

1992（平成4）年

竹 籐 漆

総高10.0 幅30.1 奥行18.0 一口

M1315 JA200300478000

（該当なし）

（蓋覆紙定三墨書）「竹良斎/野辺の里」（箱側面墨書）「野辺の里/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」（包裂）「朱文方印「安竹庵」」（作品底刻）「安竹」（附属品）年譜1枚 風呂敷に定三氏「竹良斎/花籠「野辺の里」」墨書



45 あんどうちくりょうさい
安藤竹良斎
てかこほなれ めいみず
手籠花入 銘水すまし

1999 (平成11) 年
竹 籐 漆
総高24.0 幅38.7 奥行25.2 一口
M1310 JA200300473000
(該当なし)

(箱側面)「水すまし/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」
(蓋裏定三墨書)「この籠は上から見れば水すまし/
離れてみれば国王冠/定」(包裂)「朱文方印「安竹
庵」」風呂敷に定三氏の「竹良斎/花籠 銘「水す
まし」/この籠は上から見れば水すまし/離れて見れ
ば国王冠/定」墨書

No.34《手付籠》M2396の写し。定三氏から課題
の様に提示されたが、立上部分の編み方は独自に考
えた。製作に非常に苦勞し半年以上を要した。
(2018年2月5日安藤氏より。編者聞取)



46 あんどうちくりょうさい
安藤竹良斎
むしかご
虫籠

1992~1999 (平成4~11) 年
竹 漆
総高22.2 幅19.0 奥行17.6 一口
M1314 JA200300477000
(該当なし)

(箱側面)「虫籠/竹良斎/黒文方印「竹良斎」」(附
属物)作品展パンフレット・年譜1枚 風呂敷に定
三氏の「竹良斎/虫籠」墨書

虫籠は虫壳とともに秋の季語になっており、この
場合の虫は鈴虫や松虫など、鳴き声を楽しむ虫を指
している。千宗旦がこれを花入に見立てた。(編者)



47 あんどうちくりょうさい
安藤竹良斎
とうぐみはっかくかましき
籐組八角釜敷

1999 (平成11) 年
籐
径14.8 一枚
M2308 JA200300822000
(該当なし)

(箱裏底墨書)「籐組釜敷/竹良斎 黒文方印「竹
良斎」 風呂敷に「竹良斎/籐組/八角釜敷」墨書